

[東洋の古代美術展によせて]

如来の衣相とその表現

—大和文華館所蔵の仏像から—

如来は出家者としての着服の姿で表わされ、それは上に着る大衣(袈裟とも言う)と、大衣の下の僧祇支と裙より成っています。

一枚の大布を身につける大衣の着法には古来より二つの方法があって、右肩を出す偏袒右肩と、両肩を覆う通肩です。偏袒右肩は弟子が師に奉侍する衣式で、通肩は師が弟子に臨む時、あるいは遊行、乞食の時に用いる衣式と言われています。従って、如来は最上位の師でありますから常に通肩を取るべきですが、偏袒の像も多く、これは規則違反ということになります。偏袒の如来像は、インドに早く現れており、それがガンダーラにも影響したと思われます。

この二つの着衣法の他に、中国では、中国式の通肩が考案されました。北魏の孝文帝の480年頃からです。これは、「皇帝即如来」の思想を打ち出して、仏教によって国家を統一しようと言う北魏建国以来の政策をより強固にするためのものです。そのために、如来の衣裳を皇帝に似せて変革しました。襟を胸の下に下げて胸前を大きく開け、それまでは肩の上にはね上げていた衣端を左腕にかけて外側に長く垂らし、袖のように見せることになりました。開いた胸には

僧祇支を押さえた紐の先を長く装飾的に垂らして、皇帝が正面に下げた太帯の替りとし、裙の紐も大衣の裾下からのぞかせて華やかさを添えることになりました。これを紳帯式仏衣と言います。

さて、当館のガンダーラから日本までの仏像彫刻にも、以上のような如来の三種の衣相を見ることが出来ます。そこには、共通の衣相であっても、国と時代によって表現の違いが現れています。同時に、衣の襞の表し方が衣の下の肉体表現と密接に係っていることが分かります。それらの点を次に見て行きましょう。

ガンダーラのスワート出土で、2～3世紀の制作と見られる二仏・供養者像(図1)では、短い体軀の二体の如来像が通肩の大衣に身を包み裾の裾をごく短く見せて足首を露出させています。どちらも右手を施無畏印とし、左手は、位置はそれぞれ異なりますが、いずれも衣の端を纏んでいます。衣の襞は左右から茶杓型に浅く彫られ、軽やかで自由な表現です。そして、衣の下の肉体の存在を襞の変化によって表しています。向って左の像は少し太目の体軀に大らかな襞で、量感と腹部辺りの盛り上りや、また、両像とも内側の脚の大腿部

から膝にかけてに襞を全く施さぬことによって、脚の量感と曲げた膝を明示しています。

ガンダーラ式通肩の衣相は唐時代の四面仏にも見えていますが、比較の為に統一新羅の金銅如来像(図2)が適当です。この像では、襟を少し広くあけてゆったりと大衣をまとい、その端を左肩にはね上げて左腕の外から背面に渡って衣端を表しています。大衣の裾は短く、U字形に作り、強い彫りでU字形の襞を繰り返しています。扁平な体軀ですが、盛り上った襞の下に腹部辺りの立体感が僅かに把握できます。両脚も裾の下に立体的に形造られています。ただし、背面では、左肩の衣端の表現のみで裙と大衣の描出は行っていない。ここではガンダーラの像と異なって裾の裾が足首を覆い、台座にまで達しています。

仏典に面白い記述がありまして比丘や比丘尼たちのスカート(裙)はマキシ、ミニは勿論、ザクロの花のようにギャザーを沢山寄せ、オオギヤシの葉のように沢山襞をつけていたということを行っています。そこで、取り締りのために戒律が発令されました。「內衣は長すぎても短かすぎてもいけない、くるぶしの上下、手のひら一つの長さ以内に収めること。ジグザグにせず、蛇のようにフレアーをつけないこと。オオギヤシの葉のような襞をつけないこと。」如来衣についてはどうであったか、上のガンダーラ像の裾は短く、本像のは長い。そして、どちらも裾に襞を

寄せているように見えます。ガンダーラの像は一般に、遊行像を表すかのように裾は短いようです。

中国・北魏の472年銘の石造如来坐像(図4)と金銅の如来坐像(図3)は、どちらも偏袒右肩衣で右肩に僅かに衣端をのぞかせ(金銅像では側面のみにそれが見える)、瞑想の禪定印のポーズを取っています。両像とも僧祇支を見せ、大衣の襟を下に下ろして対角線状に表す共通点があります。石像の方は細い上半身と太い腕、幅広の膝に衣が密着していますが、体軀の起伏は正面からは把握できません。襞は極めて細く密に、浅彫りされて、細い体軀と共にインドのマトゥラーの影響が見られます。金銅像は小像ですが、衣には襞が強く彫り出されており、両者の違いは明らかです。

中国の唐～宋時代か、朝鮮の統一新羅～高麗時代かと思われる木彫の如来立像(図5)も右肩に衣端をかける偏袒右肩衣です。僧祇支を着けず、胸の隆々たる肉付けを露わにしています。僧祇支の紐の一方を外に垂らして変化をつけ、全体に襞を深く複雑なほどに多く刻んでいるのが顔貌のくせの強さとマッチしています。時代の降下を示すもので、腰以下の厚みも衣の下に十分に感じ取れます。

そして、完全な中国式通肩(図6)になると、厚い衣の下で、肉体の立体的表現は後退して行き、それを衣裳彫刻とさえ呼ぶようになります。

(村田靖子)

1 石造二仏供養者像
ガンダーラ・2～3世紀



2 金銅釈迦如来立像
朝鮮・統一新羅



3 金銅如来坐像
中国・北魏



4 石造釈迦如来坐像
中国・北魏



5 木彫如来立像
中国・唐末



6 石造如来立像
中国・北魏

